



発行所 独立行政法人 国立病院機構 西別府病院
 住 所 〒874-0840 大分県別府市大字鶴見4548番地
 TEL 0977-24-1221 FAX 0977-26-1163
 ホームページアドレス <http://www.nbnh.jp/>
 印 刷 有限会社 中央印刷



謹賀新年

豊後二見ヶ浦

目 次

新年のご挨拶.....	2	リレー・フォー・ライフ大分 2016 に参加して	11
西別府病院『肩肘関節外科』『野球医学科』—	5	今日もあなたの応援団！心と身体に活力を ～2016健康フェア～	12
平成28年度 QC活動奨励表彰 九州グループ優秀賞 ...	6	★～クリスマス会を終えて～★.....	13
病診連携セミナー	7	職場紹介	14
平成28年度結核合同研修会に参加して	8	人事異動	15
大分県重症心身障害児者在宅支援推進事業 (平成28年度)について	9	外来診療担当表	16
第14回腎臓病教室を開催しました	10	ボランティア募集	16

理 念 私たちは、常に研鑽し、患者さまのために最良の医療を提供します

基本方針 1. 患者中心の医療 2. 患者の権利と尊厳を守る 3. 政策医療の推進 4. 地域医療への貢献
5. 最良・安全医療の提供 6. チーム医療の推進 7. 経営基盤の確立

患者さまの権利 1. 良質で安全な医療を受ける権利 2. 十分な説明を受け、質問する権利
3. 自分で医療の内容を決定する権利 4. プライバシーを保護される権利 5. カルテ開示を受ける権利
6. セカンドオピニオンを受ける権利 7. 臨床研究への参加と拒否の権利

新年を迎えて

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

旧年中は皆様に大変お世話になりましたことを心より御礼申し上げます。

今年の十二支は酉で私は年男です。酉は鶏のことですが、酉という漢字がなぜあてられたのか十分理解できておりません。ただ、酉は「とりこむ」という意味につながり商売などには縁起がよく、酒に関係する部首でもあり果実の成熟とも関係するようです。酉年にあやかり、平成29年が皆様にとりましても、病院にとりましても実り多い年となることを祈るばかりです。

12月の日曜日、快晴の天気誘われ散歩していたところ、道沿いから見えるある学校の掲示板に目が留まりました。以前同じ掲示板で王安石の「梅花」という詩が掲示され印象に残っていましたが、膝の調子が悪く久しぶりの散歩で通りかかったところ詩が変わってありました。掲示されていたのはサミエル・ウルマンの「青春」という詩の一節です。実はこの詩は、かのマッカーサー



院長
後藤 一也

元帥が座右の銘としていたもので、東京・千代田区にあったGHQの執務室に掲げられていたそうです。学校には詩の和訳が掲示されておりましたが、そのままでは多少気恥ずかしくここでは原文を紹介します。

You are as young as your faith, as old as your doubt;

As young as your self-confidence, as old as your fear;

As young as your hope, as old as your despair.

医療や病院を取り巻く環境はますます厳しくなり、課題を一つこなしたと思った矢先にさらに新たな課題が現れるといった状況です。自身も還暦を迎え体と相談しながら課題に向かうことも少しずつ多くなっています。それでも気持ちを新たにして、目標実現や課題克服に向けて職員の皆様と共に取り組んでいく所存です。本年もどうぞよろしく願い申し上げます。



新年のご挨拶

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

平成28年は国内各地で未曾有の震災が発生し、甚大な被害をもたらされた年でした。中でも4月の熊本・大分地震は、今なお復旧が困難な地域も多く、被災された皆様には衷心よりお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。別府地区にある当院も被災はあったものの、大きな混乱なく乗り切ることができましたことを関係各位に御礼申し上げます。

旧年を踏まえ、今年は、従来の医療安全対策、医療の質の向上に加えて災害対策を改めて見直す年にしたいと思います。医療安全マニュアルおよびクリニカルパスの充実、ヒヤリ・ハット報告の推進ならびに確認の徹底を行い、より安全で質の高い医療を目指します。昨年は医療安全管理チームの努力により、与薬業務における



副院長
原 政 英

ヒヤリ・ハットを着実に減少させることができました。また、クオリティマネジメント委員会を中心に長期入院中の患者様に対する定期検査体制を充実させ、疾患の早期診断と予防に取り組んでまいります。さらに昨年から定期開催している災害対策委員会において、院内災害対策マニュアルの改訂を行い、震災を想定した対策を進めてまいりたいと思います。

そのためには、医療専門職だけでなく全職員が役割を分担して医療を行う「連携と協働」と、それに基づく「チーム医療」の推進が欠かせないと考えています。関係の皆様の御理解と御協力をお願い申し上げまして新年の御挨拶といたします。

申年から酉年になって

事務部長
野 口 利 幸

新年明けましておめでとうございます。

昨年、日本は、地震や水害等の自然災害の猛威にさらされました。当院も熊本地震による病棟の被害がかなりありましたが、ほぼ復旧しています。人的被害がなかったことは不幸中の幸いであったと思います。改めて危機管理の重要性を認識した年でもありました。

今年は、アメリカ大統領の交代、隣国である韓国の混乱等、世界の先行きは不透明さを増しています。当院の取り巻く状況も、患者数の低迷など、厳しい環境となっています。

今年度、機構病院の多くが経常収支が赤字に転落しそうな厳しい状況となっています。当院も、ぎりぎりのところで推移しており独立行政法人に移行後、初めての赤字の可能性もあります。しかし、ポジティブに

考えると明るい未来がないわけではありません。長年の懸案事項である「中病棟の建て替え」という大きな目標があるからです。人は夢や目標があれば、難題であってもそれに向かって頑張ることができます。今こそ、当院が一丸となってこの目標達成に向かって頑張る時だと思います。そのためには、職員一人一人が、当院の理念「私たちは、常に研鑽し、患者さまのために最良の医療を提供します」に立ち返り実践することで道が開けると確信しています。

私一人では、微力ですが職員の皆様と共に西別府病院のために働きます。

今年もよろしくお願いたします。

新年のご挨拶

看護部長
佐 保 美 恵 子

新年明けましておめでとうございます。

平成28年度の診療報酬改定は、医療機関の機能分化・強化と在宅医療の充実を図るものでした。そこで、地域においても安心・安全な医療・看護を提供することが出来るよう、昨年は地域医療連携室の体制強化を行いました。地域医療連携係長として看護師長を配置し、訪問看護認定看護師、医療社会事業専門員2人、事務職員の5人体制としました。このメンバーで、セーフティネット系の医療を中心に、それぞれの患者さんが住み慣れた地域で、安心・安全に生活を営むことが出来るように、各医療機関や介護保険事業所との連携

を図り、地域のニーズに応じた看護の提供ができることを目指し、スタートさせました。

看護部の目標である「今を懸命に生きる患者さんやご家族の思い」を受けとめ、患者さんの意思決定支援に携われる看護職の育成に、地域医療連携室のメンバーとともに引き続き頑張っていきたいと思っています。

今年の干支は酉です。「とり」は“とりこむ”と言われ、特徴として親切で世話好きと言われます。思いやりの心をもって、病院経営に参画していきたいと思っています。

今後とも宜しくお願いたします。

西別府病院

『肩肘関節外科』
『野球医学科』整形外科医長
馬見塚 尚孝

西別府病院『肩肘関節外科』『野球医学科』では、2つの専門分野に特化した医療サービスを提供しています。一つは肩が痛い、腕が上がらない、肩が外れる、テニス肘が良くなならない、動きが悪いといった肩や肘の専門的治療を行うことです。

たとえば『転んでから腕が上がりにくくなり、夜中から朝方に肩が痛くて目が覚めてしまいます』、というような相談を受けることが多々あります。このような中には『肩腱板断裂』という『すじが切れた』場合があります。リハビリや注射、内服を併用して改善する場合がありますが、保存療法で効果がない方、比較的若い方、労働者、などは手術を行った方が良い場合があります。手術は関節鏡を用いて行いますが、腱移行を追加する場合などは小切開を追加する場合があります。

ほかに肩で多い手術は『肩関節脱臼の関節鏡下関節唇形成術』、『肩関節拘縮の関節鏡下授動術』、『肩鎖関節脱臼の観血的整復術』、『胸郭出口症候群の内視鏡下第一肋骨切除術』などです。

胸郭出口症候群はあまり良い検査法がなかったため、頸椎疾患、肩疾患などとの鑑別診断が難しかったのですが、MRIの最大値投影法を用いた動静脈の描出法などで(図1)、病変部の描出が可能となっております。また、内視鏡下第一肋骨切除術を行っており

ますが、病変部をきれいにみながら手術が可能となり(図2)、手術の安全性が向上するとともに手術時間が短くなりました。

もうひとつの診療科である『野球医学科』は、野球にかかわるすべての医療問題の相談窓口としての役割と、ジュニアからプロまで高度な診断と治療を行うことを目標としております。

例えば、野球選手にときどき見かける『抑うつ』はさまざまな人間関係の中で発症しますが、心療内科などへの受診はハードルが高く、当科で初療を行っております。もちろん野球選手に多い『肩、肘、腰』の診断、病院での治療、アスリハ、再発予防など、医療者としての視点に加え、コーチングスタッフとしての経験から選手や保護者をサポートいたします。

野球医学科で多い手術としては、『肘内側側副靭帯再建術』、『上腕骨小頭離断性骨軟骨炎への骨軟骨柱移植』、『肘関節鏡下遊離体摘出術』、『テニス肘手術』などです。いずれも細かなテクニックを必要とする手術で、多くの経験を必要とします。

外来は、より良いサービスを提供するために完全予約制としております。電話またはホームページより予約していただきますようお願いいたします。



図1：胸郭出口症候群のMRI最大値投影
矢印のところで鎖骨下静脈が途絶している



図2：内視鏡下第一肋骨切除術

平成28年度 QC活動奨励表彰(平成27年度取組) 九州グループ優秀賞



タイトル：さあ、KENSAしましょ
 ～採血量・採取管の削減で患者さんと採血者の負担軽減！
 そして安全で安心な検査結果を返そう～

チーム名：研究検査科 キュットスリムになり隊

この度、私たち研究検査科キュットスリムになり隊の取り組んだ QC 活動が、九州グループ優秀賞を受賞しました。

取組要旨

当院は重症心身障害児や筋ジストロフィーの療養施設を有しており、採血に時間がかかり、採血管数が多い場合は、さらに採血者の負担となっていました。従来、血清で行う生化学・内分泌・外部委託検査は8mL採取用の採取管をそれぞれ用意しており、採血困難（採血に時間がかかったなど）が原因で溶血が起り得ます。また、検査に必要な最低限以上の血液が時間をかけずに採取できたとしても、それぞれの採取管に分注することで、1本当たりの分注量は少なくなり、採取管の本来の規定量に対する陰圧

の影響などが、溶血するもう一つの要因となっていました。再採血を余儀なくされている現状を少しでも改善することを目的として、生化学検査（血清検体）と外部委託検査（血清検査：特殊容器除く）の採血管容器数の一本化に取り組み、採取管を1本でも減らすことを目指しました。システムの設定内容変更（マスターの変更）等を行い、結果としてラベルに最低限の採血量が表示されるようにし、採取管数の減少により溶血による再採血や採取量不足による再採血は大きく減少し、採取管の使用数も減り、経費削減にもつながりました。

1 従来のラベルと問題点①

① 従来の採血管は、生化学・血液・内分泌それぞれに用意されており、採血時に採血者の負担が増える。また、採血量が少ないと、採血管内の陰圧が強い為、溶血が起きやすくなる。

2 従来のラベルと問題点②

② 従来の採血管は、生化学・血液・内分泌それぞれに用意されており、採血時に採血者の負担が増える。また、採血量が少ないと、採血管内の陰圧が強い為、溶血が起きやすくなる。

3 採血管集約後

③ 生化学と血清で採血を行う時のラベルが一枚に集約された。また、外注の項目が複数あり採血量が多くなる場合は同じラベルが複数枚出力される。

④ ラベルに最低限の採血量が表示されるようになった。

病診連携セミナー

地域医療連携係長
佐藤 恭子

平成28年4月より、地域の医療機関との連携強化への取り組みを行ってきました。地域医療連携室の強化もその一つです。また、さらなる取り組みを進めていくため、当院の診療内容において、地域の病院及びクリニック、訪問看護ステーションに貢献することを目的に病診連携セミナーの開催を行うこととなりました。病診連携セミナーは年4回（6月、9月、12月、3月）第3火曜日にカンファレンス室にて計画しております。今年度、第1回目は10月18日にセミナー開催となりました。院長先生の開催趣旨の挨拶に始まり、九州リンパ浮腫センター長 唐原外科部長による「リンパ浮腫その1」の講演の後、地域医療機関との活発な意見交換が行われました。12月20日には「リンパ浮腫その2」と題して、リンパ浮腫へのより具体的な対応を内容とした講演がありました。今後も、地域へ貢献できる研修内容を検討し、質の高い研修ができるよう計画していきたいと考えております。

参加申し込みについては、開催月の1ヶ月前に、当院のホームページ等にてお知らせを行います。皆様の多くのご参加をお待ちしております。



平成28年度 結核合同研修会に参加して

中4病棟
播磨佑介

当院は大分県で唯一の結核拠点病院であり、県内各地域で開催される大分県福祉保健部健康づくり支援課主催の「結核合同研修会」に私たち結核病棟の看護師が講師として参加しています。

「結核合同研修会」は当院と県内各地域の保健所が協働して地域の高齢者を支援する社会福祉施設等の職員を対象に、結核の早期発見及び地域の結核患者の支援体制の充実をはかることを目的とし、毎年県内4～6か所で開催し、平均90名ほどの参加があります。研修会は、看護師が「結核の基礎と患者支援の現状」について60分、保健師が「地域における結核対策」について30分の内容で講義しています。看護師の講義内容としては、“結核とは何か？”という基礎に加えて、結核の治療、DOTS(直接監視下短期化学療法)の実際について、結核に関わったことがない方でも理解できるような内容で講義しています。さらに、正しい知識を持った上で、対応できるように、施設で患者が発生した場合の具体的な対応方法についても盛り込んでいます。研修後、対象者から“結核患者の対応に困ったが正しい対応を知って安心できた”“今も結核が発生している現状が分かった”といった声がよく聞かれます。こうした声や研修後のアンケートを参考にしながら、常に講義内容を見直し、研修の充実を図っています。

「結核」に対する社会のイメージについて、集団感染を報じるニュース番組で注目されたり“結核は過去の病気ではない”と訴えるテレビCMを見る機会も多くなりました。このように少しずつ社会に意識されつつありますが、いまだに診断の遅れが問題視され、まだまだ過去の病気として扱われているのが現状だと思います。

大分県についていえば、結核の新規登録患者のうち、65歳以上を占める割合が75%を占め、全国値を大きく上回っています。さらに、平成27年度の結核の罹患率は17.1で全国ワースト4位であり人口の割に結核の発生が非常に多い地域です。このような現状から、県内において、高齢社会にある現在、高齢者施設での結核感染拡大の懸念もあるため、患者の早期発見がますます重要です。

また、現在までの患者発生時の対応を見ると、対象者を含め地域住民の結核に対する偏見や恐怖心が根深く残っていると感じています。私たちは、この偏見や恐怖心を排除するためには、それぞれが正しい知識を持って対応することが最も重要であると考えています。これからも研修会の参加を通して、結核患者の早期発見と感染拡大の防止、同時に結核に対する偏見や恐怖心を排除し、支援体制の充実に貢献していきたいです。



大分県重症心身障害児者在宅支援 推進事業(平成28年度)について

療育指導室長
能 美 禎 夫

平成28年度から平成30年度の3年間、当院が大分県から「大分県重症心身障害児者在宅支援推進事業」を受託しました。事業目的は、①自立支援協議会を中心とした、地域の主体的な課題解決、②重症心身障害児・者とその家族が地域で安心して暮らせる在宅生活の実現、③重症心身障害児・者に対応できる相談支援事業所の増加、④医療・レスパイトも踏まえた適切な計画の作成、となっています。平成28年度は、まず重症心身障害の基本的理解を主とした研修を相談支援員、事業所、ヘルパー、医療機関や一般向けに計画をしました。平成28年度は、モデル圏域として、日田市(玖珠町、九重町も含む)、竹田市(豊後大野市も含む)、別府市で実施します。次年度以降は大分県全域を視野に入れて実施する予定です。事業実施担当者は、療育指導室長(責任者)、経営企画室長、地域医療連携係長、そして県の福祉保健部の職員となっています。

11月に5回の研修を実施しました。一般の方向けに行った11月29日の日田市の研修以外は、相談支援専門員、サービス事業所、ヘルパー等向けに研修を行いました。以下は研修の概要です。

■【「地域における在宅の重症心身障害児・者の支援について」11月1日(火)参加者14名:竹田市役所】
基本的理解と在宅における災害時の対策についての講義を行い、質疑応答も医療及び福祉の支援の在り方についての問題で盛り上がりました。

■【「地域における在宅の重症心身障害児・者の支援について」第1回:11月17日(木)参加者37名/第2回:11月24日(木)参加者37名:日田市役所】
2回に分けて実施しました。基本的理解、看護、災害時の対応、人工呼吸器管理、ソーシャルワークの講義を行いました。



○「在宅における災害時の対策について」
(山崎訪問看護認定看護師/11月24日 日田市)

■【「重症心身障害児・者の基本的理解と対応について」11月22日(火)参加者51名:西別府病院 療育ホール】
この研修では、重症心身障害の基本的理解、口腔ケア、リハビリテーション、栄養管理、行動療法、ソーシャルワーク、日中活動支援、個別支援計画の10の講義を1日かけて実施しました。途中病棟の見学も行い、参加者は満足したようでした。



○重症心身障害児・者の行動療法
(橋本心理療法士/11月22日 西別府病院)

■【「重い障害を生きるとはということか～重症心身障害児者を理解する～」11月29日(火)参加者51名:日田市役所】

この研修は、一般の方を対象に行い、民生委員の方が多く参加していました。重症心身障害の基本的理解、重症心身障害の歴史、人権、差別、虐待、人生についての講義、そして在宅で療養している重症心身障害の方の父親のお話があり、参加者は興味深く話に耳を傾けていました。



○在宅で暮らすということ(重症心身障害者の家族のお話)

今後、竹田市、日田市の相談支援専門員、サービス事業所、ヘルパー等の方の西別府病院の重症心身障害病棟見学、災害時の対応について研修を考えています。来年度からは大分県全域を視野に入れて事業を進める予定です。

第14回 腎臓病教室を開催しました

経営企画係長
小池 由 哉

去る11月18日（金）、当院の恒例行事である腎臓病教室を今年も開催しました。早いものでこの教室も今年で14回目の開催となりました。この教室では、当院小児科部長の平松先生を中心に各職種からメンバーを集め、医師、薬剤師、理学療法士、管理栄養士といった様々な職種の職員が、それぞれの専門的な知見を活かして、腎臓病の治療方法や、病気の進行を遅らせるために必要な生活習慣について講義を行いました。当日は腎臓病の患者さんやそのご家族、学校の保健の先生など、37名の方にご参加いただきました。

教室の前半は、腎臓専門医、循環器専門医、薬剤師による講義がありました。腎臓専門医からは腎臓の機能や慢性腎臓病（CKD）について、循環器専門医からは腎臓病と心臓病の関係について、薬剤師からはお薬を服用する際の注意事項などについて、それぞれお話がありました。

後半は、腎臓専門医、理学療法士、管理栄養士の講義がありました。講義だけではなく、腎臓病の患者さん向けの簡単な運動の紹介や、食品の塩分についてのクイズなどもあり、参加した子どもたちにも楽しんで頂けたようでした。

講義の後には腎臓病食の展示会がありました。ご飯やパン、カップめんなど、腎臓病の患者さん向けに栄養素が調整された食品が紹介され、試食も行われました。

腎臓病の治療には長い期間がかかることが多いため、症状改善のためには普段の生活習慣の改善が非常に大切となります。この教室でお話しした内容が、腎臓病で治療中の方やその周囲の方々がこの病気と向き合っていくのに少しでもお役に立てれば幸いです。





リレー・フォー・ライフ大分 2016 に参加して

看護部 外来
リンパ浮腫療法士
大野 慎 二

10月8日(土)から10月9日(日)にかけて大分スポーツ公園大芝生広場にて、リレー・フォー・ライフ大分2016が開催されました。今年は途中から嵐に見舞われましたが、54チーム総勢5800名(サバイバー144名を含む)が参加しました。リレー・フォー・ライフとは、がん征圧を目指し、サバイバーと呼ばれるがん患者や家族、支援者が24時間交代しながら歩き続け、勇気と希望を分かち合うチャリティーイベントです。ここで集められた募金は、がん治療に関する研究や若手医師育成の奨学金、がん検診受診率アップの活動、無料相談ホットライン等に活用されます。当院も7年間連続で参加しており、コアメンバーを中心に会議を重ね準備をしてきました。全職員から参加者を募り、他職種との垣根を越えた連携を行っています。がん体験者やそのご家族を先頭にリレーウォークがはじまり、その後各チームが続々と自分たちの旗を掲げ、リレーウォークが始まっていきます。メインステージではダンスやサバイバーズトークが催され楽しく歩くことができました。夕方になると道の両側に暗い道を照らした「ルミナリエ」が灯ります。この光の道は何とも言えない幻想的な雰囲気があり、人と人とのつながりを強く感じる瞬間でした。

その他、テント企画とし

て各団体による物販等が行われています。当院からは飲料販売とネイルアートが出店されました。夕方から嵐、夜間は暴風雨に見舞われ、設置していたテントも飛ばされてしまいそうにもなりました。しかし、雨風に負けず、テントを守りきり、夜を乗り越え、仲間と迎えた明るい朝は、普段感じる事のない清々しい気持ちに包まれていました。

今を生きている喜びや、歩ききった達成感、共に過ごした時間を分かち合いながら参加者全員でハイタッチを交わし、少し寂しさも残りますが、24時間続いていたリレー・フォー・ライフを今年も無事に笑顔で終えることができました。普段話すことがない仲間と楽しみながら過ごした時間は、チームとしてのつながりや目には見えない大きな絆を感じることに繋がりました。最後になりましたが、ご参加・ご協力いただいた患者さん、ご家族、全職員の方々へ、チームを代表してお礼申し上げます。



今日もあなたの応援団！
心と身体に活力を
～2016健康フェア～

心理療法士
(健康フェア実行委員)
橋 本 裕 貴

秋が深まってきた10月29日(土)、「西別府病院健康フェア」が開催されました。

今年は、「古戦場太鼓」の子どもたちの力強い演奏とともに開会し、会場内の雰囲気は盛り上がりを見せかけていました。

ドーム型のエアートント内では、「古戦場太鼓」に続き、子どもチアダンス「PONY-Z」によるダンスパフォーマンスが披露されました。子どもたちの、かわいらしさとキレのあるダンスに、観客の皆さんの表情も笑顔いっぱいでした。今年のステージイベントには、病院職員で構成された「西別府温泉地獄バンド」も初出演。職種も音楽経験も様々ですが、「音楽が好き」という点は、メンバーの皆さん共通です。この日のために、仕事が終わった後、練習を重ねていたそうです。ステージの最後は、「別府商業高校、別府翔青高校吹奏楽部」による演奏でした。高校生とは思えない堂々とした演奏と、顧問の先生の楽しいトークで、予定していた演奏時間はあっという間に過ぎてしまいました。観客の皆さんからも大きな拍手がおこっていました。

また、ステージの周辺では、野菜、果物など農産物、手工芸品や大分県産の食材を使った健康食品など多くの店が並び賑わっていました。焼きそば、炭火焼き、ケバブなどもあり、お昼時は、行列ができる場面もありました。綿菓子とバルーンアートは、子どもたちに大好評でした。今年も、出店やステージイベントには、多くの方々のご協力をいただきました。

さて、今年の健康フェアのスローガンは、「今日もあなたの応援団！心と身体に活力を」でした。病院内に設けられた「健康相談コーナー」や「測定コーナー」には、多くの方が来られていました。ここでも、測定を希望する方々で長蛇の列ができていました。中には、「いろいろな検査が無料でできて、結果も丁寧に説明してくれるから、毎年きています」というような声もありました。

また、AED講習会も昨年に引き続き2回行いました。ここでも、「昨年も参加したけど、とてもわかりやすい話だったので、今年も来ました」という方がいらっしゃいました。

今年も、地域の皆様、入院または療養中の患者様など多くの方々楽しんでいただける健康フェアになったのではないのでしょうか。健康フェアを成功させたポイントは、健康フェア実行委員の「責任感」と、職員全体の「職種を超えたチームワーク」だと思います。



古戦場太鼓



PONY-Z



西別府温泉地獄バンド



別府商業高校
別府翔青高校 吹奏楽部



物販の様子



会場の様子1



ネイルアート



会場の様子2



健康相談



身体測定



AED講習の様子



リハビリ

来年は、これまで積み重ねてきたものを大切にしながら、さらに満足していただける「健康フェア」になればと思います。



2016年のクリスマス会は、東1・2病棟は各病室で行われ、東3・4病棟は療育支援棟ホールで行われました。その時の様子を少し紹介させていただきます。

まずは東1・2病棟！！今年のテーマは「小さな光のクリスマス」今年も昨年と同様、各病室で12月2日～22日の間で行われました。一人一人の前にはイルミネーションや手作りの小物で飾ったクリスマステーブルを置き、キャンドルサービス、点灯式！「3・2・1」の掛声で点灯すると「きれい！」「すごい！」「手づくりなの？」などの歓声が聞こえて、患者様の表情がぱーと明るくなりとても輝いていました。その後は患者様参加型のトーンチャイム演奏や、千本引きゲームで身につけるパーツを引いてもらっての記念写真撮影！スタッフによる出し物では「シャネルズ」の仮装をし、歌や踊りを皆様にプレゼントしました。音楽と共に身体が揺れたり手足でリズムをとられたりと静かな雰囲気からパーティーならではの賑やかなクリスマス会を過ごし、「楽しかった～」「よかった～」との声が聞かれ皆様笑顔で過ごされた一時でした。そしてお

待ちかねのプレゼント！！22日には神経内科医師や病棟師長、看護スタッフと共にサンタに変身して配りました。

次に東3病棟は14日、東4病棟は15日に療育支援棟ホールで行われました。キャンドルサービスにサククス演奏、毎年恒例の寸劇では「おおきななぶ」を行い、おじいさんとおばあさん、auのCMでお馴染みの桃ちゃんに浦ちゃん、金ちゃんなど次々に登場！「うんとこしょ！どっこいしょ！」の掛声がホールに響いていました。最後には今話題のピコ太郎まで登場し会場全体が笑いに包まれ盛り上がりました。ゲームでは1人ひとりケーキのパーツをつけていき1つの大きなケーキ4個出来上がりました。そしてお楽しみのケーキバイキング。今年は「イチゴムース」と「ラクトコーヒー」でホール全体に甘い香りが漂い患者様の笑顔の絶えない素敵なクリスマス会となりました。

最後に、多くのボランティアさんのご協力、スタッフの皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。



ケーキバイキング
「ラクトコーヒー」



東3 ケーキゲーム



東1・2 クリスマステーブル



東4 キャンドルサービス



東3・4 寸劇「大きななぶ」



東1 「シャネルズ」の仮想ともに

職場紹介

・リハビリテーション科 ・東1病棟

リハビリテーション科



リハビリテーション科のスタッフ数は、佐古田リハ医長を筆頭に、理学療法士10名、作業療法士5名、言語聴覚士3名、リハ助手1名の計20名であり、ここ数年で大所帯となりました。患者様に対し、多職種で関わり連携を図りながら、身体状況およびニーズに対応した適切な医療と、円滑なサービスの提供に心掛けております。

当科の特色として、心臓リハビリテーションや呼吸リハビリテーション、臨床工学技士との協同による排痰訓練、スポーツリハビリテーション、がんリハビリテーション、リンパ浮腫や肥満症患者への運動療法・指導、重症心身障害児(者)ディケアでの運動療法、在宅訪問リハビリテーション等と、幅広い分野に関わっております。

チーム医療のかなめとなるように他部門との連携を深め、また、地域住民の方々にも信頼されるようにスタッフ一丸となって頑張っていく所存です。

(理学療法士長 大浦 宏樹)

東1病棟



東1病棟は正面玄関から一番奥の新棟1階にあります。病棟北側の病室からは、ヒーリングパークの四季折々の情景が見え、季節の移り変わりを感じることができます。

東1病棟は、神経・筋難病、重症心身障害の患者様が療養されています。病床数は50床で常に満床の状況です。

「患者様に安心して過ごして頂ける療養環境の提供と個々のニーズに合った社会参加を支援します。」をモットーに、神経内科医師4名、小児科医師3名、血液内科医師1名、看護スタッフ46名（看護師36名、療養介助専門員7名、業務技術員3名）で患者様の治療、看護、介護を行っています。

人工呼吸器が35台、24時間稼働しているため、安全には細心の注意を払い管理を行っています。病状の進行は、患者様個々によって異なりますが、ADLは、食事、排せつ、清潔、体位調整など生活全般において介助を要します。患者様のQOLを低下させないため、療養指導室やリハビリ部門と協力し、入院生活に楽しみを見出せるよう趣味活動を通し、患者様のQOL維持を目指しています。

(看護師長 林田 あけみ)